

まえがき

本書は、1990年代ガーナのココア生産村のモノグラフである。

ガーナの主要輸出産品であるココア（カカオ豆）は、そのほとんどがガーナ人農民による小規模経営によって生産されている。本書ではこの小農輸出作物生産の社会的諸側面の特徴を、ガーナ南部の三つのココア生産村での実態調査をもとに明らかにしようとした。実態調査および本書の分析で注目したことは、個々の農民が土地や労働力などの資源にどのような権利を有しているのか、またそのような権利関係は土着の諸制度とどのように関連しているのか、という点である。さらに諸資源への権利関係と土着の制度とが、ココア生産に関与するさまざまな主体間に存在する権力関係とどのように結びついているのか、という点についても明らかにしようとした。

上記のような視点のもとに解明しようとした問題は2点ある。第1は、地域独自の社会関係や制度のなかに埋め込まれている、広い意味でのインセンティブ構造である。本書では土地権利の実態や労働力の調達関係およびジェンダー関係などの分析により、価格以外の面でのインセンティブ構造に光を当てようとした。第2は、南部ガーナにおける農村変容である。およそ1世紀の歴史をもつ南部ガーナのココア生産の実状は、土地に対する人口圧力の増加、生産者の世代交代、政府の政策転換などさまざまな要因の影響を受けて変容しつつある。本書ではこの変容の一端を、実態調査から得られた資料と先行研究との比較によって明らかにしようとした。

本書の内容を各章ごとに簡単にまとめると以下ようになる。

まず序章では本書の研究課題を提示するとともに、本書の研究内容を先行研究の流れのなかに位置づける。同時に、調査の方法と調査村の概要を明らかにする。

第1章では、ガーナのココア生産の概要をマクロな視点から述べる。これは第2章以降で展開されるミクロレベルでの分析を行うにあたっての、予備知識を提供するものである。

第2章では、ココア生産と労働の関係を分析する。第1節ではまずココア生産に必要な労働力がどのように調達されているかに注目し、家族労働力、雇用労働力、共同労働などが個々の農民の事情に応じて相互補完的に使用されていること、農作業における排他的な性別分業は観察されないことなどを指摘する。次に第2節では、先行研究でもとりあげられてきた分益小作を新たな視点から分類してその特色を詳述し、加えてこの契約がなぜ定額小作制や固定賃金制よりも選好されるのかを明らかにする。

第3章では、ココア生産と土地の問題をとりあげる。この章では1片の土地に対して複数の主体が同時に権利を有している事実を指摘し、その結果農民が土地に対して行使できる支配力の度合いが多様でかつ流動的になっていることを明らかにする。次に個人の土地保有面積の細分化と保有者の分散化が進行していることを示し、その背景として、(1)1片の土地に対して多様な権利要求が同時に存在しているために土地が分割されて贈与相続される傾向があること、(2)土地なし層が土地を取得できる土着の制度が存在していること、(3)未開墾地の取得が困難になり土地集積が行われにくいこと、などの要因があることを明らかにする。

第4章では、ココア生産とジェンダーの関係に注目する。まず居住集団内部の社会経済関係の分析から、生産、消費、資金管理、労働提供などにおける「世帯」内の複雑な関係を明らかにする。次に、ジェンダーと土地、ジェンダーと労働の関係をそれぞれ分析し、土地権利や労働力へのアクセスの面での男女間の不均衡な関係を明らかにする。同時に、女性農民同士の間には存在する格差についても言及する。全体としてこの章では、「世帯」を分析の最小単位とする方法や、「男対女」の単純な2分法による分析方法が、ガーナのココア生産村の現状を理解するには不十分であることを示す。

第5章では、ココア生産と経済格差の関係を、土地、労働、ジェンダー、

村民のライフサイクルなどの視点から分析する。ここではココア生産における土地権利関係、労働力の調達方法などが経済格差としての階層と密接に関連していることを指摘する一方で、同じ階層内でも年齢やジェンダーなどにもとづく質的な相違が存在していることを明らかにする。同時に経済格差の構造は固定的なものではなく、その変動の方向性には中農標準化の兆しがみられることを指摘する。

第6章では、近年の政策変化の小農生産への影響を、二つの事例をもとに分析する。第1はココアの国内流通制度改革である。ここではココアの国内買付けに関する近年の政策変化が、大規模生産者層と小規模生産者層との間に異なる影響をもたらしたことを指摘する。第2は土地登記の問題である。ここでは土地権利登記法の施行（1986年）の背景にある議論を整理し、その議論が必ずしもガーナの土地権利関係の実態と合致していないことを指摘する。

最後に終章では、本書の議論を整理し、ココア生産の社会的側面とインセンプティブ構造、およびココア生産村の歴史的な変容のプロセスを論じる。

本書を出版することができたのは、まずもって調査地3カ村の農民の方々の協力のおかげである。多忙な農作業の合間や農作業の後の貴重な休息時間を、筆者の聞き取りのために割いてくれた多くの方々にこの場を借りて感謝したい。

本書のもとになった実態調査は、筆者がアジア経済研究所の海外派遣員として1995年から97年にかけてガーナに滞在している間に行った。本書はその調査資料を、アジア経済研究所の研究会「アフリカ農村変容とそのアクター」(平成9年度) および「変貌するアフリカ農村—その現状と展望—」(平成10年度)を通じてまとめた成果である。ガーナ滞在中はガーナ大学統計社会経済研究所 (Institute of Statistical, Social and Economic Research, University of Ghana) に籍を置かせていただき、さまざまな便宜供与を受けた。また同研究所のニャンテン (V. K. Nyanteng) 氏と友人のオフオス (S. B. Ofosu) 氏は、

公私にわたって筆者の研究を支えてくれた。帰国後の研究会では、メンバーの方々から多くのアドバイスを受けることができた。とくに上記研究会の主査である池野旬氏（京都大学）、専門員の高橋昭雄氏（東京大学）、委員の武内進一氏（アジア経済研究所）には、草稿を通読していただき有益かつ詳細なコメントをいただいた。また平野克己氏をはじめとするアジア経済研究所のアフリカ研究グループの方々からは、本書の出版に関して多くのサポートをいただいた。記して深く感謝したい。

最後に本書を、私の最も尊敬する農民である両親と、最愛の息子大地に捧げたい。

1999年9月

高根 務